

忘れぬ味がある。あれは昭和39年、東京オリンピックの興奮もまだ冷めやらぬ秋の日曜日だった。父の知り合いから小さな竹籠が送られてきた。中を見た父と母はサッと顔色を変え「大変だ」とつぶやいた。何事だろう……。ただならぬ様子に、8歳の私は緊張した。「マツタケよ、マツタケが来たわ!」

Taste
of
the Season vol.2
text by Noriko Morishita
illustration by Mizue Hirano

あの日、 マツタケ

エッセイスト
森下典子

さえも感じた。
父が、緑色の小さなスタチを絞って回しかけると、爽やかな香りが広がった……。
「さあ、食べよう!」
私は、しんなりとしたマツタケの柄を箸でつまんで、そっと噛んでみた。
「……………」
繊維の切れるザクザクとした小気味よい歯触りと音が、頭蓋骨に鳴り響く。噛んでも噛んでもザクザク鳴って、繊維の奥から味が染み出るのだ。程よい塩気を

ぐりしたのもあれば、柄の長い、傘の広がりかけたものまでごろごろと7、8本。母は1本つまんで柄の硬さを確かめ、縦に裂いた。その断面は生木のように白く、裂けた繊維の束が糸のように見えた。(私は今も、裂けるチーズを見るたび、あの日のマツタケを思い出さずにはいられない)。母は鼻を少し近寄せると「うわ、この香り」と目を輝かせ、籠を抱えて台所に消えた。

その晩、母が作ったのは「マツタケの銀紙焼き」だった。熱々の銀紙を広げると、森の朝霧のような湯気ともわーっと上がり、その瞬間、部屋の空気が一変した。それは「香り」なんてもものではなかった。空気が味に染まったのだ。
(これがマツタケの匂い……)

ホタテやサザエを焼くと、濃厚な海の香りが食欲をそそる。マツタケも生木のエキスのような濃い匂いで、どこか塩気帯びた得も言われぬ香りがふわーっと鼻に抜けていく……。銀紙と一緒に包んだ銀香も、銀紙の底の焦げ付きも、部屋の空気さえもマツタケの香りに染まり、私の心にはマツタケが強烈にしみ付いた。「松茸の味お吸い物」が発売されたのは、同じ年の秋だった。私は、またマツタケが味わえると思ったが、買ってみるとそれは茶色い薄っぺらな小袋だった。
(こんな小さな袋の中に?)

封を切ると、中からは乾燥したお麩やネギなどがサラサラ出てきただけで、あのずんぐりとしたマツタケの姿はどこにもない……。それでも、もしかすると、ランプから魔人が現れるように、お湯を注げばマツタケが現れるかもしれない。そう願いながらお湯を注ぎ、湯気の上からお吸い物をふうふうと吹き冷まししながら目を閉じ、じつと香りを嗅いだ。すると……温かな湯気の中に、マツタケの香りの幻が、ふっと立ちあらわれ、そして消えた。

あれから50年過ぎたが、その後、あれほどのマツタケには会っていない。秋が来るたび私は、東京オリンピックの年に食べたあのマツタケの思い出に生きている。

もりしたのりこ／神奈川県生まれ。横浜市在住。日本女子大学文学部国文学科卒。『週刊朝日』の名物コラム「デキゴトロジー」のライターを経て、エッセイストとなる。主な作品に、『日々是好日』『猫といっしょにだけで』(新潮文庫)、『いいいたべもの』(文春文庫)など。